
LANSTER ~ 執務官の憂鬱 ~

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L A N S T E R 　〈執務官の憂鬱〉

【Nコード】

N 5 2 7 9 X

【作者名】

虹鮫連牙

【あらすじ】

とある次元世界で起こっている事件を調査するためにやって来たティアナ・ランスター執務官の物語。　この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

前編

門を潜り抜けてからどれだけの距離を走っただろうか。ハンドルを握る両手とシートに乗せた腰、どちらも長く同じ姿勢でいるから少し疲れた。

管理局支部を出発してから約三時間。アルシオーネ邸へと続く林道の入り口によく辿り着いたと思ったら、そこから更に十分は走っている。こんなところに住んでいて不便じゃないのかしら。広大な庭付きの大邸宅に暮らすというのも、それはそれで大変だと思う。

視界に飛び込んでほとんど流れ消えていく、針葉樹林に挟まれた屋敷へと通じる道。終わる気配もないままその道はずっと続いた。オートバイのエンジン音も、こんな道のりを走らせてばかりいるせいか、退屈そうな欠伸に聞こえてしまっただけで仕方が無い。

しかし、それよりも先に私の方が、フルフェイスヘルメットの下で大口を開けてしまっていた。

「Are you sleepy?」

少しだけ呆れたような声が、私の胸ポケットから聞こえてきた。

「……………ごめん、気が抜けてた」

優秀な相棒の咎めにたじろぎながら、私は前を見据え直した。

すると、立ち並ぶ木々の頭より高いところに、紅色の三角屋根が見えてきた。

「なんだ、もうすぐじゃない」

いつの間にか屋敷まで間もない所に来ていたんだ。相棒の言葉が無ければ、あの屋根も木々の陰に隠れたまま気付かなかったかも知れない。本当に気が抜けているみたいだ。

「しっかりしなくちゃ。」

だって、せつかく執務官になっただけだから。

屋敷の玄関前にバイクを止めた私は、扉の前に立って呼び鈴を鳴らした。

光沢のある石造りの柱と雨除けの下で返事を待っていると、呼び鈴の隣にあるインターホンのパイロットランプが赤く点滅をした。

『少々お待ちください』

初老らしい男性の声。この声が屋敷の主なのか、それとも召使いの人なのかは分からない。まあ、たぶん後者なんだろうけれど。

ほどなくして、玄関扉が中から開かれた。

開いた扉の向こうに立っていたのは、エラの張った顔をにっこりと微笑ませた老紳士と言った風な男。卸したてのように綺麗な黒のスーツと蝶ネクタイが、彼のかしこまった立ち振る舞いによく合っていた。

「ティアナ・ランスター”様でいらつしやいますね？”

やつぱり。インターホンから聞こえた声はこの人のものだった。

「はい」

「ようこそいらつしやいました。主が応接室でお待ちになっています。さあ、こちらへどうぞ」

丁寧に柔らかな物腰の彼に案内され、私は屋敷に足を踏み入れた。案内を受けて歩いていている間、私は自分のやるべきことを頭の中で思い描いていた。屋敷の主人に会って、最初はどのような切り出し方で話をするべきか。自分が尋ねたいことをさりげなく会話の中に織り交ぜるためには、どのような空気を作り出すべきか。そもそも屋敷の主人はどのような男なのか。彼の人間性によって臨機応変さが求められるわけだし、こんなシミュレート自体が無駄に終わってしまうんじゃないか。

考えれば考えるほど、心臓の鼓動が少しずつ動きを早めていた。緊張してるんだ、私。

「こちらのお部屋にて主がお待ちです」

召使いの言葉を聞いて、私は思考の渦に埋もれかけていた自身を引き戻すことが出来た。

召使いが部屋の扉をノックし、私を案内してきた旨を告げる。部屋の中から声は返ってこない。

「ではどうぞ」

沈黙は了承の証。召使いの手がドアノブをゆっくりと回しながら、部屋の扉を押し開いた。

私が部屋の中に入っていくと、暖炉を備えた広い部屋の中央に、細かな彫刻が施されたローテーブルと濃緑色のロングソファが並べられていた。

そして、いつからそうしていたのか分からないが、ただ真っ直ぐ立って私と向かい合う男が一人。

「はじめまして。“トラヴィック・アルシオーネ”といいます」

「はじめまして。時空管理局員のテイアナ・ランスターです。突然のご訪問、申し訳ありません。この度はお時間を割いていただきましてありがとうございます」

「構いませんよ。屋敷にいる時は暇を持て余していることの方が多い。歓迎いたします」

トラヴィック・アルシオーネ。四十九歳。ここでは広く名の知れた資産家だ。

二十歳の頃に、この地でしか採れない特殊鉱物の輸出ルートをとんど牛耳って、一代にして巨富を手にした人物。

しかしそれだけではない。元からの専攻なのかどうかは不明だけれど、歴史研究家、宗教研究家、思想家として多くの著書を出すという一面も持っている。

また、彼は慈善活動家としてもよく知られた人物で、その活動資金に自身の財産を惜しみなく使う姿が報じられることもしばしばある。時々、別の慈善事業団体から「我々に対するあてつけのようで、過剰な行為だ」などというお門違いな批判が起こるほど。地元の人々からは、ある種の信仰にも近いぐらい尊敬されている人物だ。

「突然話を伺いたいと言われた時は驚きました。しかもあなたは時空管理局員の執務官だと言う」

「お忙しい中申し訳ありません」

年齢の割には少し顔の皺が多くて深い。実年齢よりも歳を重ねていそうな印象を受けた。だけど、私よりも長く伸びた癖毛の黒髪だけは、若々しくて艶やかだ。

アルシオーネはしゃがれ声で言った。

「いやいや、先程も言った通り、屋敷にいる時は常に退屈しているものでね。それに、一度管理局員の方と話をしてみたいと思っています。年寄りのお喋りに付き合ってもらうみたいで、私の方が礼を言わなくては」

召使いが部屋を出て行く姿を横目で見やりながら、私は小さく頭を下げた。

「しかし意外だ。難関で知られる執務官試験に合格し、事件を追いかけて多忙な毎日を送っている執務官にも、まさかあなたのような美しい“お嬢さん”がいるとはね」

「え、ええ、まあ……………」

「それに若さ故のエネルギーシユな雰囲気伝わってくる。執務官と言えば、もつと堅苦しい人物をイメージしていたのだが」

そう言ったアルシオーネは、私のことをじっと見た。

まさか服装を見られているのだろうか。管理局支部で借りられる乗り物がオートバイしかなくて、スカートの制服では乗れないからと、仕方なく私服を着てきてしまったから。ジーンズにブーツ、それに着慣れた皮ジャンではさすがにラフ過ぎたかも。

「……………アルシオーネ卿、よろしければすぐにでも本題の方に入りたいのですが」

「ランスター執務官は、今までどれぐらいの事件を解決されてきたのですか？」

一瞬だけ言葉を詰まらせた。なんだか嫌なところを突いてくる。

「……………つい最近、ようやく正式な執務官となつたばかりです…

……あの、アルシオーネ卿、実は」

「ほう、この間執務官になられたばかり？ それはそれは、おめでとうございます。ということは、これから活躍する期待の新星、ということですね」

また、言葉が出てこなくなった。

オブラートに包まれてはいるが、その実、彼の言葉には刺々しいものが含まれていることは明らかだ。そんな言葉を前にして、私は沈黙してしまった。

「執務官と言えば、管理局員の中でも特に重責かつ重要な、しかし、だからこそ優秀な人材ばかりのポジションだと思っています。管理局の掲げる正義を、我々民間人がもつとも強く感じら」

「アルシオーネ卿！」

抜け出したかった。今すぐこの場から抜け出して、喉が破けるくらいの大声で訳も分からない言葉を叫びだしたかった。

そんな想いを全部出すことは出来ないけれど、ほんの少しだけ、百分の一くらいを込めた声で、私は彼の話を遮った。

「本題に……入りたいのですが」

声は震えていないだろうか。

堪える、私。

私の声を聞き、アルシオーネは少しの間だけ口を閉ざすと、再び微笑んで言った。

「これは失礼。ついついお喋りになってしまったようだ」

その時、ちょうどさっきの召使いがお茶を運んできてくれた。

湯気立つ紅茶に、私は角砂糖を三つ放り込んでかき回し、まだ熱いのも無理矢理堪えて一口だけ口に含んだ。

むせてしまいそうなほど甘ったるい味に舌を焼かれているみたい。でもその苦痛が、私の気を紛らわせてくれる。

「甘いのが好きでしたか？」

「……ええ、まあ」

よし、少しだけ落ち着いた。

咳払いを一つしてから、私は言葉を続けた。

「……………お話というのは、二ヶ月前からこの近辺で起こっている“連続無差別殺人事件”のことなのですが」

そう言った瞬間、アルシオーネの表情が少しだけ変わったような気がした。

「ええ。毎日流れるニュースのむごたらしい報道内容に、心を痛めています」

彼の視線が私の視線と重なっていることに気付き、私は少しだけ唾を飲んだ。

全く逸らさない。それに逸らせない。

「酷いものだ。被害者は老若男女を問わず、だそうですね」

「そうですね。今まで被害に遭われた方々は、昨晚で十二人となりました。ニュースでも報じられておおり、被害者は最高齢で六十二歳。一番若い歳では九歳。非常に痛ましく、早急の解決を要する事件です」

「それで？ 私に話というのは？」

「実は、昨晚殺害された被害者のことについて少々お伺いしたいことがありまして」

私がそう言うと、またアルシオーネの表情が変わったように思えた。

なんだろう。どこか、少しだけ嬉しそうに見える。

とにかく、今は彼の言葉を聞くことの方が先だ。

なんてたつてこの事件はあまりにも惨すぎる。さつきも言ったとおり、早い解決が必要なんだ。

連続無差別殺人事件と報道されてはいるが、実を言うと、それぞれの殺人が果たして一つの事件として括っていいものかどうか、それさえはつきりしない事件だ。

まず、被害者は年齢も性別もばらばらであること。それでも何か彼等に共通するものがあれば、捜査にある程度の進展が期待できる。しかし、この事件の被害者には共通項が無さ過ぎるため、犯人が同

一の存在なのかが定かではない。それに加えて殺害方法も様々で、何か法則があるようには思えない。

それなのに無差別連続殺人事件と呼ぶ理由は、すべての事件がこの地域近郊で起こっているということと、あまりにも短期間の間に集中して発生しているからに過ぎない。

では、なぜ私がアルシオーネに話を聞きに来たのか。

それは、昨晚殺害された十二人目の被害者が、殺害された場所からそれほど離れていない地点で開催されていた、アルシオーネの講演会に参加していたからだ。

そういう事情だから話を聞きに来たと、私は彼に告げた。

「些細なことでも構いません。もし何かご存知のことがあれば、是非協力していただきたいのですが」

私の言葉が終わると、アルシオーネは頷いた。

「もちろん、私に出来ることがあれば協力させてもらいたいとは思いますが……ただ、残念ながら昨晚の講演会に被害者の一人が参加していたからと言っても、私自身は有益な情報を持っていない」

「……………そうですか」

「すまないね、役に立てなくて」

いや、まだ私からの話は終わっていない。

まだ彼には、訊かなければいけないことがあるのだ。

「実は、その十二人目の被害者なんですが、講演が終了した後であなたと」

「ランスター執務官」

今度は私が話を遮られた。

その時のアルシオーネの声がとても鋭く感じられて、私は言葉を止めずにはいられなかった。

「あなたは、執務官になったばかりだとおっしゃいましたよね？」

またその話か。

正直、執務官としての私に関する話は、個人的にも避けたいところだ。

「大変でしょう、初めて担当する事件がこんなにも凄惨なものでいろいろと心配事はないですか？」

この男、一体何を言っているの？

私は膝の上に乗せた拳に力を込めていた。

私がこの手の話を嫌う理由は、はつきり言っただけで自分に負い目を感じているから。

確かに執務官としての経験はまだまだこれから積み重ねていこうとする段階だ。だけど、一つ訂正しておきたい。私はこの事件が初めての担当事件ではない。これは私が担当する“二つ目”の事件なのだ。

しかし、執務官試験に合格し、晴れて執務官として認められてから初めて受けた事件は、それほど難しいものではなかった。だから今回のような凶悪事件を担当するに当たって、戸惑う部分が多いこともまた事実。

アルシオーネの言葉の端々から感じられる、私の未熟さを嘲る気持ち。

悔しい。なんだかとても腹が立つてくる。

それに、さっき彼が言った“ある一言”も、正直に言っただけで屈辱的だった。

「年頃の女性には少々酷というものだ」

やめろ。

「ねえ……………」

だからやめろ。

「お嬢さん」？

私は勢いよく立ち上がった。

反論出来るわけではない。

しかし、何か動かさずにはいらなかった。言葉に出せないのなら、何かしらの態度で示すしかなかった。

この男にはまだいろいろと聞きたい話がある。

だけど、今のこの状況でそれらを冷静に処理出来るかどうか、自

信がない。

今の私は、たぶんとても嫌な目をしていることだろう。目線だけでも対等以上にありたいと思って、ソファーに腰掛けたままの彼を、私は立ち上がって見下すようにしているのだから。

彼の言うことに返す言葉を持っていない。返せるだけの実績も自信も無い。

だから私は立ち上がった。

私ってば、子供っぽい。

アルシオーネは不敵に微笑みながら、召使いに言った。

「おや、お帰りですか。ではすぐに見送らせます」

事件を担当する間の寝泊りは、この世界の管理局支部にある宿舍を借りることになっている。

私は宿舍の駐輪場にバイクを停車させてから、ヘルメットを外した。

「……………はあ」

アルシオーネ邸での私の挙動には、我ながら呆れた。バカみたい。本当はもっと話を聞き出す予定だったのに、私は何をしているんだろう。

アルシオーネには、事件の目撃情報や些細な手掛かりとなる話があれば聞かせてほしいという名目で会いに行つたわけだが、本当の目的はそんなことではなかった。

実はこの事件、トラヴィック・アルシオーネは第一容疑者として名前が挙がっているのだ。

と言つても、十二人目の被害者が殺される直前、現場付近の防犯カメラの映像に被害者とアルシオーネの姿が映っていたことが分かつて、彼に容疑がかけられたのは今日になってからの話。

彼が犯人だと決め付けるにはまだ早いが、それでもようやく掴ん

だ手掛かり。これを逃す手は無いんだ。

私は宿舎の玄関を潜りながら、明日もう一度アルシオーネ邸を訪れるように、頭の中で予定を組んだ。

宿舎の玄関を潜り、白色光の照明に照らされながら廊下を歩いていく。用意された部屋は宿舎の四階。部屋までが遠く感じるのは、凹んだ気持ち足枷になっているからだだろうか。

「ランスター執務官、お疲れ様です」

エレベーター前にいると、後ろから声を掛けられた。

振り向くと、そこには隣の部屋で暮らす管理局捜査官の男性がいた。名前は知らない。年齢は私と同じか、それよりも少し上くらいだと思う。

「どうも。お疲れ様です」

「アルシオーネ邸に行つてらしたんですよね？ どうですか？ 尻尾は掴めましたか？」

首を横に振りながら、私は微笑んだ。

「いいえ。それに、尻尾を掴むと言つたつて、まだ彼が犯人だと断定も出来ませんから」

「まあそれもそうですね」

彼も笑った。

宿舎には寝泊りするだけだけに帰ってきているようなものだし、日中は事件現場や支部の鑑識部署へ行つたり来たりしているので、落ち着いていない。

そう言えばここに来て、仕事以外のことをあまり喋ってないな。

私は少しだけ勇気を出してみた。

「あの」

「はい？」

「この辺りでおいしいレストランとか知りませんか？ 私、帰ってきたばかりでお腹空いちゃった」

「ああ、ありますよ。おすすめの場所が」

「え、本当ですか！？」

「はい。地図描いて渡すんで、一度行ってみてくださいよ」

彼は夕飯を済ませたのだろうか。もし良かったら一緒に食べに行けたりしないだろうか。

あれ？ 私は何を求めているんだろう？

「俺も最近行つてないから、たまにはゆっくり行きたいんですけどね……………ほら、今日も夜勤ですよ」

そう言つて彼はデバイスを取り出すと、メール機能を起動させて上司からの呼び出しメールを見せ付けてきた。

「……………これからお仕事ですか」

「はい……………あ！ 地図ですよ。すぐ描きますから」

やつて来たエレベーターに彼と乗り込み、四階へ上がると、彼は手早く地図を描いて渡してくれた。

それを私が受け取ると、彼はすぐに宿舎を出て行ってしまった。

ため息がまた漏れる。

部屋に入り、財布とデバイスと地図をテーブルの上に置くと、私は服を脱ぎ捨ててすぐにシャワーを浴びた。

夕飯は、宿舎の一階にある売店で済ませてしまおう。一人で食べるのも、なんだか虚しい。

孤独に慣れていないわけではない。両親は小さい頃に亡くしているし、育ててくれた兄さえも死んでからは天涯孤独の身なので、一人でいる時間は嫌と言うほど経験している。

執務官という仕事に対する情熱もある。兄の夢でもあった仕事だ。簡単に投げ出せるほどの半端な覚悟でこの道を選んだわけではない。

なのに、今の私に満ちている気持ちは何だろう。

頭から爪先まで、全身にシャワーの湯を滑らせながら、私はしばらく固まった。

シャワーを浴びているのに、あまり温かさを感じない。

下着とTシャツだけ身に着けてから、タオルで髪を拭きつつリビングに向かうと、テーブルの上に置いた私のデバイス、“クロスミラージユ”が点滅していた。

近づいて手に取ってみると、どうやらメールを受信しているようだ。

メールを開いてみて、思わず笑みが零れた。

「スバル……………」

さっそく通信端末を用意し、親友であるスバル・ナカジマに回線を繋ぐ。

数回の呼び出し音が鳴った後、端末のモニターには久しぶりに見る友人の笑顔があった。

「やつほー！ ティア、調子はどう？」

スバル・ナカジマ。訓練校時代から“機動六課”という部隊に属していたまでの間、ずっとコンビを組んでいた私の元パートナー。

それに、私の人生においてかけがえの無い親友でもある。

今は災害救助隊で頑張っている彼女。持ち前の元気と丈夫な体で順調にやっているようだ。

「調子なら良いわよ。どうしたの？ 急に連絡してきて」

「別にい。たまには連絡取ってみようかなって思っただけ。忙しいのに邪魔しちゃいけないと思ってメールにしたんだけど、今は平気なんだ？」

彼女らしさの伝わる明るい声。それは昔からちつとも変わらないまま。

正直に言っつて、スバルとの電話がもの凄く嬉しかった。自分は今にも寂しがり屋だったのだろうかと本気で首を傾げたくなくなるほどに、スバルの明るい言葉が一言一句、体に染み込んできて温かい。執務官という仕事に対して、変な誤解を抱いていたつもりはない。ましてや前所属の機動六課が解散した後は、私の上官であった“フエイト・テストロツサ・ハラオウン執務官”の元で補佐をしてきた。そう、執務官がどういいう仕事なのかは、フエイトさんを通じてずっ

と近くで見えてきたはずだ。

だから、執務官の仕事は華やかなものではないことも、過酷なことも、充分知っているつもりだった。

だけど。

『 って言うもんだからさあ、笑っちゃうよねえ！ 父さん
つては最近の家電には疎くつて』

「 …… ねえ、スバル」

『 ん？ 何？』

「 ありがとう」

『 え？ …… うえええ！？ ティアってはどうしたの？ 何か
あつた？』

私は今まで、随分と恵まれた環境にいたのかも知れない。特に機
動六課は、少し居心地が良すぎたようだ。

あそこは仲間には困まれていて、嬉しいことがあると皆で喜べたし、
悔しいことがあると皆で力を合わせられた。

間違った時には厳しく咎めてくれる人もいたし、悩んだ時には傍
で励ましてくれる人もいた。

真っ直ぐに、一生懸命に、不安を恐れずに頑張ることが出来た。

だから、今の私は何だからしくないなと思う。

『 …… ティア、ありがとうつて？』

「 大したことじゃないわ。ただ、こつちでは私のことを皆“ランス
ター” って呼ぶの。“ ティアナ” って呼んでくれる人が誰もいない
から、それがちよつと嫌だっただけ」

『 そつか …… あのさ、ティア。なんか困ったことがあつたら、
いつでも連絡くれたつていいんだからね。私はほら、ティアが悩ん
だり困つたりしてるんだつたら、任務中だろうと何だろうと必ず力
になるからさ』

「 任務中はそつちに集中しなさいよ。災害救助隊でしょ？」

『 じゃあ救助しながら相談に乗るからさ！ ね！ だからティアは
一切遠慮することなく、いつだつて連絡してきていいんだから。そ

りやあ、私が何か食べてる時はちょっと口が塞がっちゃうからあまりお喋りは出来ないけれど、そういう時は急いで食べ終わるから。食べる量は減らせないけれど、スピードを上げることなら」

「スバル、うっさい」
久しぶりのやり取り。

私とスバルはお互いに笑い合っていた。

少しだけ元気が出たかも知れない。彼女と話をすることで、私は忘れかけていた自分らしさを見つけた気がした。

そうだ、私はあまり出来の悪いほうではないけれど、それでも努力に関しては誰よりも頑張れる自信がある。

執務官の経験だってこれから積み重ねていける。未熟だと言われようとも、すぐに穴は埋めてみせる。

機動六課時代に、周りの人達の才能に負い目を感じて無茶をしたことがあった。あの時の私は空回りしてしまっただけで、無茶をしても穴を埋めようと努力することが出来た精神だけは、間違っていないと思う。

出来る。やれる。成し遂げられる。そう信じて、頑張ってみよう。私はまだ、そう思える。

それから、私とスバルは他愛も無い雑談に時間を費やした。

『じゃあ、そろそろ切るよ。おやすみ、ティア』

「うん、連絡ありがとね。おやすみ」

端末のスイッチを切ると、私は晴れやかな気分のままベッドへ横になった。腕や腿、それに満面の笑みを作る頬から伝わるシーツの感触が、とても心地良い。何だかすぐにでも眠れそう。

明日も忙しい。

早く寝よう。

そうして翌朝目を覚ました私が顔を洗っていると、管理局の捜査

部隊から緊急連絡が入った。

内容は、例の事件絡みと思われる、十三人目の被害者が発見されたというものだった。

所持品から判明した被害者の身元は、“デュトロ・トレント”という男性。二十三歳。

宿舎で私の隣の部屋に暮らしていた、時空管理局の局員だった。

T o b e c o n t i n u e d .

現場は重苦しい雰囲気に包まれていた。

殺人事件の現場なんてへらへらとしていられる場所でもないけれど、この現場は特別暗かった。

無理も無い話だ。時空管理局の捜査官や鑑識チームが調査している現場の中央には、彼等の同僚である男が見るも無残な姿となっているのだから。

あまりにもむごたらしい光景。目隠し用の幕で現場は囲われており、町民達の目に入らないような配慮はされているものの、通報を受けてから管理局員が駆けつけるまでの間で既に野次馬が大勢集まっていた。

ここは町の中にある人気の少ない小さな公園。昼間であれば多少なりとも人の行き来はある場所だが、夜ともなればまるで別世界のように凍えた空間となるようだ。

その公園の片隅。滑り台の上で突っ伏している彼が、被害者のデユト口。使われた凶器は刃渡りの大きなナイフと思われ、体のいたるところを切り刻まれている。手の指は何本か失われているし、大腿部は骨が露出してしまっている。公園の土の上には砂で汚れた肉片が飛び散っていて、集まるカラスを追い払う局員の姿があった。

「死亡時刻は何時頃ですか？」

私は主任捜査官の男に問いかけた。でっぷりした体の後ろで腕を組みながら、彼はゆっくりと私の方に向き直った。

「昨晩は夜勤だったようですが、深夜零時半頃の交代時間に、夜食を食べにいったそうです。パスタを食べたのでしょうか。そして、おそらく殺害されたのはその直後」

「何故分かるんですか？」

「裂かれた胃からパスタが流れ落ちて、滑り台の上を滑っていました。ほとんど未消化の状態だったのですね」

昨晩言葉を交わしたばかりの人との再会がこんな形であることに、私はショックを受けた。

しかし、それを顔に出して周囲に悟られるわけにもいかない。

私は一体何をしにここへ来たのかを思い出せ。

私は一体何者であるのかを思い出せ。

私は。

「目撃情報は、ありましたか？」

私は、執務官だ。

懸命に冷静な様を装って、言い放った。

「……………今のところ見つかっていない」

「では、デュトロ捜査官が殺される理由として考えられるものは？」

主任捜査官は一度だけため息をついた。

「……………それもない、と思う。勤務態度は至って普通。人当たり

も良く、器用じゃないが、人から恨みを買っような男でもない」

彼は、まるで思い出の情景に意識を沈ませるような穏やかな顔つ

きで、ゆっくりと言った。

「一連の連続殺人だろうと、その模倣犯であろうと、あいつが殺さ

れる理由なんて思いつかない。一体何のために……………」

誰もがそう言った。デュトロ捜査官が殺される理由なんて思いつ

かない、と。

そして、それはデュトロ捜査官以外の被害者達も同じだった。今

までの被害者を知る人物達は、口を揃えて言うのだ。

“こんな目に遭わされる理由が分からない”、と。

昨日のこともあり、私は容疑の目をアルシオーネに向けて考えて

みた。

「デュトロ捜査官は、トラヴィック・アルシオーネと何か繋がりが

あつたりしませんか？」

十二人目の被害者がそうだったから。確か、アルシオーネの開く

講演会に出席した人物が十二人目の被害者だったので、私は一つの

仮定として彼を思い浮かべてみた。

しかし、その言葉を聞いた主任捜査官は、また一つため息をついてから、俯かせた顔を横に振った。

「ランスター執務官は、アルシオーネ氏がこの事件に関係しているとお考えですか？」

「彼は容疑者の一人として名前が挙がっています」

「……………デウトロはむしろ、あなたに近い。あいつは出身が別の次元世界ですから、アルシオーネ氏に対しても尊敬の念が薄いし、十二人目とは対極に位置する人間です。私的な繋がりもないでしょう」

「……………そうですか」

本当に被害者達には共通項が無いみたいだ。

それとも、同一犯による連続殺人という見方自体が間違っているのだろうか。

捜査はちつとも進んでいない。状況は何も変わっていない。

一体どこから手を付ければいいのか。今の私に出来ることは何か。私は無力感に苛まれた。そしてそれは、この小さな公園に広がる光景を見ている度に膨れ上がっていくのだ。

執務官って何なんだろう。たまに分からなくなる。

「ランスター執務官、この後はどうなさるおつもりですか？」

主任捜査官が訊いてきた。

どうするも何も、どう動いたらいいのか分からない。

拳動不審に見えたのだろうか。沈黙するしか出来なかった私を見て、主任捜査官は私の返答を待たずに続けて言った。

「アルシオーネ氏にお話を伺いに行ってみてはどうですか？ あなたは彼を疑っているのでしょうか？ きちんと事情聴取をしてきてください。こちらの捜査は我々の方で進めておきますから」

「は、はい！」

「まあ、たぶん収穫は無いですよ」

「え、何故ですか？」

「長年の経験から来る勘、と言う奴ですね」

最後の一言が、特に嫌味っぽく聞こえた。
それは私の心が歪んでいるから？ どうしても皮肉に聞こえてしまふのだ。

長年の経験と勘。それが羨ましいなんて、私ってば愚かだ。

二度目の訪問。相変わらず玄関にたどり着くまでの距離が長い。
トラヴィック・アルシオーネの屋敷に辿り着いた私は、昨日と同じように呼び鈴を鳴らして返事を待った。

『ティアナ・ランスター執務官でいらっしやいますね？』

「ええ」

『少々お待ちください』

召使いの口調も声色も、昨日と全く変わっていないかった。
そして玄関が開かれ、あのエラの張った顔が出迎える。柔らかな物腰と、皺が際立つ大きな笑顔。卸したてのようなスーツも、案内する時の足音や歩く速度も、何一つとして変わっていない。

まるでこの屋敷の中だけ、時間が進んでいないかのようだった。
案内されている間、私は自分の格好を見て思った。

時間が止まったままなのは、自分も一緒なのかも知れない。
服装だけじゃない。執務官としてここにやってきてから、私は何もしていない。事件は一向に解決へ向かっていないじゃないか。

本当に、進んでいないんだ。

「どうぞ」

召使いが応接室の扉を開き、私を中へと招いた。

「ご主人様、ランスター様をお連れしました」

部屋に入った私の前には、トラヴィック・アルシオーネがいた。

「ようこそ。またお会いできましたね、ランスター執務官」

「昨日に引き続きお邪魔してしまって、申し訳ありません」

私が頭を下げると、アルシオーネはにこやかな表情で、ソファア

に座るよう促してきた。

「何だか機嫌が良さそうだ。何かあったのだろうか。」

「光栄ですね。ランスター執務官にこうして再会出来るなんて」

「は、はあ……」

「是非とももう一度お話をしたいと思っていた。その願いがこうして叶えられた」

「やっぱり。何だか様子がおかしくないだろうか。」

「あの、私からの話と言っても内容は」

「解っていますよ。例の事件のことでしょう。また新たな被害者が出たから、私に事件解決の手掛かりを求めてやってきた」

程なくして、召使いがお茶を持って来た。

私の前に置かれたティーカップ。湯気立つ透き通った茜色の液体からは、ほんのりと果実のような香りが漂ってきて、それが私の鼻から喉までをすうつと駆け抜けた。

召使い曰く、「甘口がお好きのようでしたので」という気配りから選んだお茶らしい。

これなら砂糖を入れなくても飲めそうだ。私はそっとカップに口づけてから、甘い香りと共にお茶を味わった。

そんな時だった。

「私を疑っているのでしょうか？」

思わずむせ返ってしまい、慌ててカップを置いた。

トラヴィック・アルシオーネ。彼は今、一体なんて言ったの？

口元を押さえながら彼を見ると、彼は相変わらずのにこやかな顔のまま、私をじっと見ていた。

「この連続無差別殺人事件、私は容疑者になっているのでしょうか？」

「そ、それは」

「隠さなくても結構だ。昨日のあなたを見てすぐに分かりました」
私は、そんなに隙だらけだったのだろうか。

いや、もっとポジティブに考えよう。

事件の話を知りたいとして、被害者とは一見密接な繋がりも無い

人物を訪ねているんだ。そんなの、「あなたに容疑が掛かっていますよ」と言っているようなもの。

そつだ。自分に容疑が掛けられていることを気付いた理由は、至極当たり前のことだ。

「……………アルシオーネ卿」

「はい？」

「昨晚、あなたはどちらにいましたか？ お聞かせください」

「こんな単刀直入の尋ね方。でも、仕方がないじゃないか。」

「私が設立した児童養護施設にいました」

「それを証明出来ますか？」

「いいえ。出掛けたのは私一人だし、子供達は全員就寝していたのでね」

「施設の職員には会わなかったんですか？」

「ええ。離れにある私専用の事務室に籠もっていましたから」

「アリバイが無い。」

「なのに、この男はこんなにも堂々と。」

「……………十二人目の被害者と面識があったかどうか、お伺いしたいのですが」

「何故そんなにも余裕のある表情を浮かべられるのだろうか。犯人は彼ではないということなのだろうか。」

「いや、たぶんそんなことではない。」

「この男、何か嬉しそうにしている。」

「まるで自分の用意したビックリ箱で誰かが驚くのを今か今かと待ち焦がれているような。」

「十二人目？ 今朝発見された遺体は十三人目では？」

「連続殺人事件と銘打ってはいますが、本当に犯人が同一かどうかはまだはっきりしていません。だから、あなたに最も関連の深い、一昨日の夜に発生した事件についてお伺いしたいのです」

「語気を少しだけ強めて、私は言い放った。」

「今の私に出来ること。」

ほんの少しでもいい。小さな一歩でもいい。

執務官である私の時間を進めたい。

時間が止まるということ、私は恐れていた。その理由は、“兄に誓った想いが止まってしまふことに等しい”から。

すると、アルシオーネの顔が少しだけ引き締まったように見えた。

その顔は、昨日私のことを“お嬢さん”と言った時の顔だった。

「アルシオーネ卿？」

名前を呼ばれた彼は、ようやく口を開いた。

そして。

「ランスター執務官」

「はい？」

「あなたは、何故執務官になられたのですか？」

彼は、一体どういふつもりでそんな質問をしてきたのだろうか。

今はそんな話をしている時ではない。私の質問に答えてもらわなければいけない。

「あの、私のしつもん」

「聞かせてほしい。これは、とても重要なことなのだ」

そう言つと、彼は傍らに用意していたノートパソコンを開いてから、その画面を目で追つた。

何をしているのだろう？

「……………ティアナ・ランスター。管理局第四陸士訓練校を卒業後、陸上警備隊三八六部隊に所属。その後、古代遺物管理部機動六課のスターズ分隊に転属した後、六課解散後にはフェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官の補佐となる」

「なっ……………」

「この程度の情報は、合法的な方法でも手に入れることは出来る。もっと詳しいことも分かりますよ。例えば、機動六課時代にあなたと高町なのは教導官の間で起こった出来事も」

「あんたっ！」

思わず席を立ち上がった。しかし、アルシオーネも後ろに控えて

いた召使いも、微動だにすることは無かった。

特にアルシオーネは、浮かべた表情から、自分が圧倒的優位にいるのだという慢心的余裕が感じられた。それがやけに憎たらしい。

「ランスター執務官」

口調すらも憎たらしい。

「私があなたに再会したかったのは、この質問をしたかったからだ。そしてその答えをあなた自身の口から、偽りの無い素直な想いをあなた自身の声で聞きたかったからだ」

おそらくだが、私が執務官を目指した理由でもある、私の経歴を彼は既に知っている。

だが、それでも私の口から言わせたいというのだ。

音が響きそうなくらい、私は歯を食いしばった。

「これはとても大切なことだ。あなたがもし、私の質問にきちんと答えてくれたら、私もあなたに話そう。私の胸の内を。嘘偽りのない、私の本心を話して聞かせよう」

そんな誘いに乗りたくはない。

でも。

「……………何の意味が？」

でも、私は揺れてしまっていた。

自分の時間を進めたくて、彼の用意した餌に惹かれ始めていた。

「きつと分かるさ」

一体、どれだけのものを差し出せば、私は進めるんだろう。

十一歳上の兄の名前はティード・ランスター。

早くに両親と離れ離れになってしまった私を育ててくれた兄は、

時空管理局の所謂エリート局員だった。精密射撃魔法が得意だった

兄は、管理局の空戦魔導師として、とても優秀だったと聞いている。

兄は、執務官になることを目指していた。家においても、私の世話

をしてくれる一方で熱心に勉強にも励んでいた姿が懐かしい。当時の私は、執務官というものがどういった仕事なのかを全く知らないで、でも、頑張る兄の姿にいつも憧れていて、心の底から応援していた。

優しくて、誠実で、私を知る誰よりも自分の仕事に誇りを持った人だった。

ある時、兄は逃走する違法魔導師の追跡任務に就いていた。そして、悲しい報せは突然やって来た。

兄の殉職。

兄の帰りを待っていた当時の私は、報せを受けた時、自分の心が崩れる音を聞いた。

たった一人の肉親でもあった兄がこの世にいないことを、私の頭はすぐには理解してくれなかった。

心の崩壊は、すなわち私という世界の時間の停止だった。私の人生は、兄の死を受けて、一度完全に停止した。

そして、更なる追い討ちと言わんばかりの出来事が起こった。

兄の死に対して、直属の上官であった管理局員が言ったのだ。

「逃走犯を前にして、任務を全う出来なかったことはあまりにも愚かだ」と。そいつはそう言ったのだ。

信じられなかった。

優しくて、誠実で、私を知る誰よりも自分の仕事に誇りを持った兄は、役立たずだと言うのか。

兄は、正しいことをして散ってしまったのではないのか。

兄が悪いのか。そんなに悪いのか。

時空管理局は、数多ある次元世界の秩序を守る存在ではないのか。そこに住まう人々の安息と安全を守る存在ではないのか。

そんな管理局の存在意義を信じ、そんな組織の在り方に誇りを持ち、その使命に命を賭した兄。

そんな兄が間違っているのか。

悪いのか。

そんなのはおかしい。正しくてたまるか。目から零れた熱い涙と、唇を噛み締めた痛みが、私の決意となった。

そして、その決意が力となって、壊れた私の心は、私の世界は、崩壊から再建への道を辿り、停まった時間は再び動き始めた。

兄のように生きて、兄の生き様を認めさせる。

間違っているのは兄じゃない。

責められるべきは兄じゃない。

想いを貫くのは、もう兄じゃない。私だ。

そう決めて、私は兄と同じ道を歩くことにした。

「……………私からのお話は、以上です」

アルシオーネに話を聞かせ終えた私は、少しだけ涙ぐんでいた。

そして、彼もまた。

「素晴らしい……………やはり君は素晴らしい人物だ、ランスター執務官」

泣いていた。私の話を聞いたアルシオーネは、皺の多いその顔を、涙で濡らしていた。

「思ったとおりだ。君は、私の良き理解者となってくれるだろう」

「ど、どういうことですか？」

ハンカチで目を押さえながら、私はアルシオーネに怪訝そうな顔を向けた。

涙で頬を光らせたアルシオーネは、ソファから立ち上がると、窓の方に歩み寄っていった。

窓からは紅い夕日が差し込んできていて、ティーカップに入ったお茶と夕日が混ざり合うようだった。すっかり温くなったお茶なのに、それでもまだ香りが強く残っている。

「ランスター執務官……………君は、“本当の悪”を知っている」

本当の悪？

「“本当の悪”とは一体どういうものなのか……………それは、誰のためでもないものだ」

誰のためでもないもの？

「私は今まで、この世で助けを求めている多くの人々を救いたいと思いい、出来る限りのことをしてきたつもりだ。貧困に喘ぐ人々も、無秩序に嘆く人々も、無力に絶望する人々も、私は救いたいと思っ
て活動してきた」

確かにアルシオーネの、慈善活動家としての働きには感心せざるを得ないものがある。

彼は自身の持つ権力や財力を、本当に多くの弱者のために使ってきた。地元で信仰的敬意を持たれているのにも、それに見合うだけの実績があるからこそ。

彼がこの近辺で何と呼ばれているのかを、私は知っている。

“真マコトの正義”、だ。

「正義とは、誰かのためであってこそそのものだ。人のためではない正義など無い」

アルシオーネは続けた。

「法に反するような、あるいは一般に許されないと認識されているようなことでも、それが誰かのためであるという強い意志のもとに行なわれているのだとしたら、悪と断定し難いのではないかと思う。何故なら、誰かのために犯した罪というのは、そこに自己犠牲をも厭わない思慕があるからだ」

「……………それは」

「では、自身の利得のために罪を犯すことはどうなのか……………私は、これも悪だとは断定しない。己を満たしたいという欲求の果てに生まれる罪は、願いを成就させるための、つまり“満たすための努力”が伴う……………私は、“他者のための努力”と“己のための努力”は紙一重であると思うのだよ」

「どづいことですか？」

「結局のところ、誰かのために何かをしたいという気持ちは自己満足であるわけで、それは自分自身の欲求だ。自己満足のための努力は、己のための努力と変わらない」

そんなものは屁理屈ではないのか。

しかし、私はそう思いながらも、彼の話についつい聞き入ってしまった。

「他者のためであろうとも、己のためであろうとも、どちらにも共通して言えることがある。それは………どちらも“人のため”であるということだ。他人も自分も、紛れも無い“人”なのだから。我々の生きるこの世界は、私達が思っている以上に“人のため”という思いやりで溢れている」

そこまで言ったアルシオーネは、突然顔つきを鋭くして、私を見た。

その視線に、思わず息を呑む。

「実は二ヶ月前、第九無人世界『グリューエン』の軌道拘置所に、慰問講演へ行ってきたんだ」

その言葉を聞き、私は目を見開かせた。

グリューエンにある軌道拘置所には、確か。

「そこに誰が収容されているか、君も知っているだろうか？」

「ジェイル・スカリエッティ………ですね」

アルシオーネが笑った。

「彼には個人的に面会もさせてもらった。実に面白い男だね、彼。

あれほど欲望に従順な人間も珍しい。そして、彼と話してみれば気が付いたんだ」

何に気付いたというのか。

私達機動六課が解決した、次元犯罪史上にも残るであろう大事件、通称“JS事件”。その中心人物の一人であった男、ジェイル・スカリエッティ。

彼に会ったことで、アルシオーネは一体何を感じたというのか

「やはり、私の考えは間違っていないかった」

彼は微笑んでそう言った。

「世の中は、思いやりで溢れている。スカリエッティは己という人のために尽力し、ナンバーズと呼ばれたスカリエッティの配下にあ

る少女達も、スカリエッツィのために動いていた。やはり、世の中は“人のため”という想いで満たされている……つまり、この世には“本当の悪”なんて存在しない」

スカリエッツィが悪ではないと言っのか。

私には、少し理解し難い思想だった。

「と、するならば、一つの疑問が浮かび上がってくる」

「疑問、ですか？」

「世界の秩序を守る存在である時空管理局は、果たして本当に正義と悪を裁けるだけの技量があるのかどうか……」

「何ですって？」

「完全なる悪が存在しない世の中で、それでも人は自らの手で善悪を裁こうとしているんだ。不思議に思わないか？ 本当の悪を知らないくせに裁けるはずなどないだろう」

その考えには同意出来ない。

それでは、拘置所にいるスカリエッツィをはじめ、全ての罪人に対して私達は裁くことが出来ない。ならば彼等をすぐに拘置所から開放し、自由にさせるべきだと言っのか。

そんなことは出来るはずが無い。

言い分があるのは構わないが、それでも誰かが裁かなければ、それこそ世界に正義は無くなってしまっ。

「やっぱりそんなのは屁理屈です。あなたの言う通り、本当に私達が悪を理解していないのだとしても、誰かがやらなければ世の中は混沌としてしまっ」

「もちろん、管理局を否定するつもりはないさ。必要な存在であると、私も認識している」

「だったら、何故？」

「そこで、思っただ」

「何をですか？」

「もしこの世に、“本当の悪”が一体どんなものなのかを示してくれる存在が現れたとしたら、人はきちんと善悪を裁けるように進化

するのではないか、とね」

「そんな存在なんて……………」

いるのだろうか。アルシオーネが言うような存在が。

「ランスター執務官は、現在調査している連続無差別殺人事件の犯人がどういう想いでいるのかを考えたことはあるかい？」

はっとした。

もしかして、この男が言いたいことは。

「一連の事件を振り返ってみたまえ。何の関連性も無い十三人の被害者。彼等が殺害された理由は何だ？ 犯人には彼等を狙わなければいけない理由があったのか？ 犯人は一体何のために彼等を殺した？」

犯人が愉快犯である可能性も否定はしない。抑えきれない殺人衝動に駆られたというのであれば、標的に関連性が無いのも納得出来なくは無い。

しかし、アルシオーネの話聞いた今の私には、もう一つ、別の考えが浮かんでいた。

いいえ、考えなんていう理論的なものではない。

思わざるを得ないような、不思議な何かに思考を支配されてしまったみたい。

アルシオーネが私にこんな話をした理由は。

アルシオーネが私との再会を望んだ理由は。

アルシオーネが是非にと私を選んだ理由は。

「あ、あなたは……………」

「少しお喋りが過ぎましたか。今日はお引取り願おう」
ふざけるな。ここでみすみす帰れるものか。

私は、アルシオーネに飛び掛かって彼の胸倉を掴んだ。

「このまま、帰れるわけがないでしょう！」

「昨日初めて出会って、しかしすぐに気が付いた。戸惑いを隠せないでいる目、迷子のように不安を孕んだ目、執務官という自分を信じられない目」

「うるさいっ！」

「だからあなたのことを調べたんだ。そして私の感じたことは間違っていないと確信した……………兄が責められた時、あなたは感じたはずだ。兄が死んだ原因となった行為は、平和のため、秩序のため、人々のためだったはず。それが悪であるはずはない、と」

「うるさいうるさい！」

「……………あなたは本当の悪が何であるかを知っている。本当に悪いものが何かを深く考え、それを心に刻んだあなたは、誰かのためにと懸命になる者達が悪ではないことを知っている。同時に、どういったものが悪なのかをあなたは知っている」

「黙れっって言ってんのよっ！」

「あなたなら、誰よりも人を裁くことに長けていると信じている。私の言いたいことを誰よりも深く理解してくれると信じている……………」

……………嗚呼、だからあなたに会いたかったんだ。愛しいと想うくらいに、あなたに惹かれてしまったんだ」

だからふざけるな。

私は、こいつが言うような人間ではない。

何だかこいつの言うことを認めるのは、怖くて仕方が無い。

「……………あなたを、逮捕します」

「証拠がないのに私が犯人だと？」

「あなたを逮捕しますっ！」

「是非とも捜査を続けてくれ。そして、また私のところへ来てほしい」

「あなたをっ！」

その時、アルシオーネの口が私の耳にそっと近づいた。

そして言ったのだ。

呪詛のような、纏わりつくような、耳を引き千切りたくなるような。

優しい口調で。

「ランスター執務官」

「うああああああっ！」
夕日に焼かれるようなアルシオーネの屋敷に、私の叫びがこだま
した。

T o b e c o n t i n u e d ,

後編

「ランスター執務官、アルシオーネ氏から何か聞きだすことは出来
ましたか？」

宿舎に帰り着いた私を待ち構えていたのは、主任捜査官の冷ややかな言葉と視線だった。

うるさい。今はそんなことを話したくは無い。

「ランスター執務官？ いかがされましたか？」

「……さい」

私は右手で額を押さえながら、声を無視して歩き続けた。

「ちよつと、ランスター執務官？」

「……っさいつてば」

何でだろう？ 頭の中がガンガン響くような気がして、真っ直ぐ歩くのも辛い。

もう片方の手を壁に当てて自分を支えながら、ふらつく体を引きずるようにして歩を進めた。

こんな苦痛もアルシオーネのせいだ。あいつが妙な話をするからこんなことになったんだ。

「聞こえているのか！？ ランスタ」

「うるさいつて言っつてんでしょ！」

おぼつかない足が危ない。エレベーターを待つことすらも苦痛に感じるほど、私は気持ちが悪く落ち着かなかった。

こんな気持ちになるなんて。どうしたらいいんだろう、私。

吐き気を抑えながら部屋の扉を開いた瞬間、私はすぐにトイレに駆け込んだ。

嗚咽と共に、この心も捨てる事が出来ればいいのに。口から出てくるものが便器の中に落ちていく様子を眺めながら、私はアルシオーネの屋敷で聞いた話を思い出していた。

アルシオーネが犯人なのだろうか。冷静になりきれない頭で考え

てもどうしようもない。けれど、考えないわけにはいかない。

正義を求める者、思いやりを求める者が行き着いた極論。それは、“本物の悪”を知らない世の中にそれを教え知らせることで、人々の道徳心を更なる高みに導くということ。

“本物の悪”とはすなわち、誰のためでもない不徳。被害者達に何もつなかりが無いのも、目的の無い殺戮こそが犯人の主張する“本物の悪”であるから。それが世界に示されることで、人々は真の善悪を知る。

まるで夢物語。偏り過ぎた持論。言葉にはならない蟠りが残る言葉だった。

仮にアルシオーネの言葉が真理を突いているとしても、そのために殺されてしまった人々や遺族を納得させることは出来ない。そして私は、そんな理屈を肯定することなんて出来ない。

それなのに、“あいつ”は言っただ。

私が、あいつの考えを理解することの出来る人間だって。

そんなはずはない。当たり前じゃないか。私はそんな考えなんて肯定出来ない。

それなのに何であいつは。

そんな時、ふと、私の頭の中に兄の顔が浮かんだ。アルシオーネの屋敷で昔話を語らされたせいだと思う。

駄目。考えちゃ駄目。考えたら、あいつの言う通りになってしまいかも知れない。

兄の顔はどんどん鮮明さを増してきて、まるでそこにいるかのようにくつきりと浮かび上がってきた。優しい目も、きめ細かい髪も、温かな手も、だんだんそこにあるような。兄がそこにいるような。

そんな兄の姿を見て、私の心が言うんだ。

兄さんは悪いことをしたの？ そんなはずはない。

兄さんは責められるべきなの？ そんなはずはない。

兄さんは間違ってしまったの？ そんなはずはない。

仮定の話。もしかしたらただけれど、世界が本当に、正しい善悪を

理解していたとしたら。

兄さんは「悪い」と言われた？

兄さんは責められた？

兄さんは間違っていた？

この世の中が、“本当の悪とは誰のためでもないことである”と理解していたのなら、兄さんはあんな風に言われることはなかった。平和のために、人々のために働いた兄さんが、役立たず呼ばわりされることなんて無かった。

世界が“本当の悪”さえ知っていたならば、誰かのために戦った兄さんが「悪い」と言われるはずなんてなかった。

歯を食いしばった。

「なんで……………」？

なんで。

「なんでよ？」

なんで、世の中は本当の悪を知らないまま、平気でいられるんだろう。

そんなのはおかしいじゃないか。理不尽だし、矛盾しているじゃないか。

真実を知らないくせに、あたかも知っているかのように。善悪の違いなんて理解出来ていないくせに、何もかもを二分しようとする。そんなのって。

「おかしいでしょう！」

叫びは響いた。

シャワーを浴びてもすつきりしない。気持ちは今でも酷く淀んでいて、息が詰まりそうだった。

早く寝よう。さっきよりも頭がますます痛くなってきちゃった。

いくつもの雫を肌の上で走らせながら、私はシャワー室の扉を開

いて脱衣場に立った。

すると、リビングに置いたデバイスが受信通知の音を鳴らせていることに気がついた。

シャワーの音のせいもあるけれど、すっかり気が抜けていたせいで気付かなかった。もしかしたらずっと鳴っていたのだろうか。

私は全身を濡らしたまま、タオルを体に巻きつけてリビングに出ていった。

でも、事件に関する連絡だったら、正直に言って今は受けたくない。

「はい、ティアナ・ランスターです」

通信回線を開くと、空中に浮かび上がったモニターにはよく知る顔が浮かび上がった。

「ようつす！ ティア……………ってあれ！？ お風呂に入ってたの！？ ご、ごめん！」

聞こえてきたのはスバルの声だった。

「なんだ、スバルか」

「ティアったら服くらい着てから回線開けばいいのに。私だから良かったけど、違う人だったら恥ずかしいよお」

いつもの彼女らしい元気で明るい声。その声を聞いた途端、私は自分の視界が一気に滲んできていることに気が付いた。

慌ててモニターから顔を逸らし、鼻を鳴らしながら目元を擦った。
「ティア？」

「……………何でもないわよ」

また、私のことを“ティア”って呼んでくれた。それだけでも充分に勇気付けられる気がした。特にアルシオーネの屋敷であんなことがあった後だから、尚更かも知れない。

私はずっと心細かったのだと思う。

兄が死んでからの私は、寂しい思いもしたけれど、良い仲間と巡り合う事が出来た。

執務官になりたいと思っていた私を応援してくれる親友がずっと

傍にいてくれたし、私を鍛えてくれた教導官も、とても厳しくて、とても優しい人だった。そして私がずっと補佐を務めた先輩執務官も、私を本当に大切に育ててくれた。

私はずっと恵まれてきた。だから、執務官となってきたちゃんと独り立ちした今、こんなにも寂しさが身に染みてしまうんだ。

加えて執務官というプレッシャーに参ってしまいそうなんだ。ちゃんと務めを果たせるのだろうかという不安は大きい。フェイトさんの下で鍛えてきたという自信はあるけれど、それは時として裏返し、心に重く押し掛かってくることもある。

自分ならきつと出来ると信じていた。フェイトさんに負けないくらいの執務官になれる、なってみせるという強い思いがあった。

だけど、なかなか上手くいかない日々が少しずつ、少しずつだけれど積み重なって、気が付いたら身動きが取れなくなっていた。

何だか、“あの頃”にちよつと似ている。

機動六課時代、私は優秀な仲間達に置いてけぼりを食らっているような気がして、自分勝手な焦りから間違いを犯し、厳しく咎められたっけ。

『あ、あのね……実は昨日のティアの様子がちよつと心配で連絡してみたんだけど……やっぱり何かあったの？』

「別に話すほどの事じゃないわよ」

スバルは、そういう勘ばっかり鋭いな。

「ただ………」

『ただ？』

「……ただ、私って執務官に向いてないのかなって」
間違いなく本音だった。

私は、自分の選んだ道が正しかったのどうか、自信が無いんだ。それでも執務官としての務めを果たそうと、私はがむしゃらに動いているつもり。だけど、気持ちばかりが焦っているようで、てんで駄目。思い通りにいかない。

自分なら、本当はもつときつちり出来るはずだと思っていた。

でも、現実はやっぱり厳しい。いつかの自分みたいに悪い方へス
イツチが入っちゃったみたいだ。

そんな時だった。

気落ちする私の耳に、少しだけ荒ぶったスバルの声が聞こえてき
た。

『そんなこと言うなんて、ティアらしくないじゃん！』

急にそんな声を出されたから、私は驚いて肩を跳ねさせた。

『六課にいた頃を思い出してよ。ティアは、なりたい自分のために
とことん努力が出来たじゃん。がむしゃらだって、間違ってたって、
なりたい自分を目指すためならとにかく突っ走れたじゃん』

「スバル……………」

それは、あの時のことを言っているのだろうか？ 六課時代に私
が過ちを犯した時のことを。

『執務官になりたかったんでしょ？ お兄さんが目指したみたい
な、立派な執務官になっていくんでしょ？ 向いてるか向いてな
いかじゃないよ、ティア』

「……………私」

焦って、逸って、空回りしていたあの時の私は、思い出してみ
てもかっこ悪い自分ではない。確かに成長するきっかけではあつた
けれど、二度と繰り返すまいと思うほどの姿。

でも、スバルはあの頃の私を、悪い見本としてではなく、私の良
い所として思い出させてくれた。

行き先を見失っている私ではなく、ただただ一生懸命な私を見て
くれている。認めてくれている。

そんな見方、今までしたことが無かった。あの頃の私が、とても
かっこいいとも言えるのだろうか。

『ティアならきつとやれるよ。ティアが執務官目指してどれだけ頑
張ってきたのかはよく知ってるもん……………だから、もうちょっと
だけ私の好きなティアを見せてほしいよ』

あの頃の私が、スバルの好きな私なんだ。スバルってば、本当に

変な子。

彼女は言っている。私に「もっと頑張れ」って言っている。今の私を「嫌い」だと言っている。

ふと、気が付いた。今の私の近くには、そんなことを言ってくれる人すらいない。

彼女は言った。私をよく知る彼女だからこそ言える、無理難題。それがとても嬉しい。

「どうする？」

『何が？』

「がむしゃらにやって、間違ってたら………どうする？」

『その時は』

その時は？

待っていた。彼女なら、答えてくれると思っていたから。

六課時代とは違う。今、ここにいるのは私一人。

そんな私がまた空回りしていたら、あなたははどうする？

『その時は、ぶったたいてでも気付かせてあげるよ』

やっぱり。

『そして手を引いてあげる。そうすれば、目標まで一直線だよ』

私は本当に良い仲間を持っている。

恐れることなく、不安がることなく、私はがむしゃらにでも突っ

走っていいんだ。

止めてくれる人もいる。背中を押してくれる人もいる。

そうだ、迷うことなんて無い。

嬉しかった。彼女なら、応えてくれると信じているから。

六課時代と同じ。決して、私は一人なんかじゃない。

そんな私だから今なら自信がある。あなたは私をなんて呼ぶ？

「スバル、お願いがあるの」

『うん、何でも言ってよ！』。

「呼んでほしいの、今の私を」

そう言うと、スバルが咳払いを一つ。

そしてまたいつもの笑顔を見せながら言っただ。

『事件解決、期待しています』

私とスバルは、モニター越しで同じポーズを同時にとった。相手を信頼する祈りと、それに応える感謝を込めた構え。

『“ランスター執務官”！』

「ありがとう」

敬礼。

一ヶ月掛かった。

あれからの私は、それまでの自分とは明らかに違っていた。

事情聴取も、現場調査も、足取追跡も、証拠分析も。執務官としての、自分の一挙一動に自信が満ち溢れていた。

この事件に着任してからの私を知る周りの人々は、私という存在の明らかな変化に目を奪われているようだった。

驕っているわけでも、自惚れているわけでもない。

自分でも不思議に思うくらい。スバルと話したあの日の夜から、酷く曇っていた気持ちはすっかりと晴れ渡った。

そう、ここまで来る一ヶ月の間で、私は大きく成長することが出来たのだ。

そうして今、私は林道を走っている。乗り物はもちろんあの時と同じオートバイ。

向かう先は、忌まわしきあの屋敷。

何度訪れても慣れない長い道のり。そして辿り着いたのは、トラヴィック・アルシオーネの屋敷前だ。

玄関前には既に二台の管理局車両が停車していて、私はオートバイを並べて停めた。

先に来ていた二台は、私よりも早く管理局支部を出発した捜査官のものだ。合計で四人の捜査官がここに向かったはずで、その四人

の中には、あの恰幅の良い主任捜査官もいたはず。

まだ車があるということは、四人とも屋敷の中か。

私は玄関扉の前に立ち、呼び鈴を鳴らした。

しかし、何かがおかしかった。

もう一度呼び鈴を鳴らすのが、応答が無い。

笑顔が特徴的な召使いはどうしたのだろうか。この一ヶ月間で屋敷には数度訪れたが、いつもあの召使いが出迎えてくれたはずだ。

ドアノブに手をかけると、玄関は呆気ないほど無抵抗に開いた。

私はポケットから待機状態のクロスミラーージュを取り出し、すぐさまバリアジャケットの装着を開始した。白を基調としたミニスカートと袖無しのジャケットが出現して、私の身を包む。同時に待機状態だったクロスミラーージュが、二丁拳銃へと姿を変えた。

足取を慎重にして、私は屋敷の中へと進み入る。進行方向には、必ずデバイスの銃口を先行させて。

その時だった。

「ようこそ、ランスター執務官」

一階ロビーの中央から伸びていく階段の上部に、鋭い視線と黒い銃口を向けた。

狙いはんもちろん、声の主。

「待っていたよ。来てくれると信じていた」

そして、奴はそこにいた。

トラヴィック・アルシオーネ。

連続無差別殺人事件の容疑者である男。 昨晚、遂に彼が事件の犯人である決定的証拠を手に入れたのだ。

「私より先に、こちらへ捜査官がお邪魔していると思うのですが？」

「ああ、奥の部屋にいるよ」

「では、私達が何のために訪れたかはご存知ですね？」

私が無言のまましていると、彼は笑顔で言った。

「私が犯人であると、そういう結論が出たのかな？」

そう言ったアルシオーネの手には、先の捜査官が持ってきたと思

われる逮捕状がぶら下がっていた。

長かった。

十三人目の被害者が出たあの日を境に私は変わり、ありとあらゆる角度から犯人の足取を追いかけてきた。

しかし、調査を進める間も被害者は増え続け、次第に近隣の住民達は管理局に対する不満を募らせ、厳しい視線を浴びせられた。私達の不甲斐無さを責め立てるデモとして、支部の入り口前に百名を越える人々が集結したのはつい四日前の話だ。

それでも捜査は根気よく進められ、数々の現場で小さな小さな手掛かりを一つ一つ見つけ出していった。そして、それらがパズルのピースとなって一つの絵になった時、事件の犯人が明らかになった。「私が犯人だという証拠が揃ったんだね？」

「ええ。ようやく」

「長いことよく頑張ったね」

「本当に長かったです、あなたへと辿り着くまでの一ヶ月間。私達管理局が止められなかった被害の数は、十件を越えます」

それは、本当に歯痒い日々の連続だった。

「そうだな。最初の事件から数えて三十にも及ぶ殺人を、君達は止められなかった」

この一ヶ月間で、私は充分過ぎるほどに思い知った。

「しかし、救えなかった数は更に多いはずだ。殺された人々には、それぞれ家族や恋人、友人、いずれにしても被害者達を想う人々がいたことだろう。君達は、遺体の数よりも多くの人々を悲しませ、絶望させてきた」

「その通りですね。本当に私達、何をしてきたんだか」

管理局と言っても、執務官と言っても、限界はある。

六課が解決した大事件や、フェイト執務官の手による凶悪事件の解決。そういった華々しい結果は目立ちこそすれど、実は全体のほんの一部でしかない。

人々のためにとどれだけ汗を流しても、夢のためにどれだけ努力

を重ねても、世界は思い通りにならないことの方が圧倒的に多い。
多くの不幸を許してしまつた時点で、私達は“本当の悪”に勝利
することは出来ないのだ。あまりにも非力である自分が情けない。
兄が目指した執務官は。私が悩んだ執務官は。誰もが信じた執務
官は。

「こんなにも、弱い。」

「何もしていないのと同じ。ランスター執務官、そんな君は今日、
私のところへ何しに来たのかね？」
弱い。

しかし、それでも動かなければいけない。

勝利が無くてもいい。

「トラヴィック・アルシオーネ……………」

ただ、今出来ることは、これ以上負けないことだ。

「……………あなたを、逮捕します」

そう言い放つと、アルシオーネが肩を震えさせながら、徐々に声
を上げて笑い出した。

ひとしきり笑った後、アルシオーネは機嫌の良さそうな声で言っ
た。

「良い目だ、とても素敵だ。やはり君は、私が思ったとおりの人間
だ」

「あなたの偏つた思想なんて支持するつもりはありません」

「いいや、君は私が睨んだとおりの人間だよ。君は人々のために、
何が何でも“本当の悪”を捕らえなくてはいけないという使命感を
持ち、私のところまで辿り着いた」

「事件の犯人を突き止めたから、逮捕しに来ただけです」

「誰かのために戦う君はまさしく正義だろう。悩み、愁いながらも
私のところまで辿り着いたという時点で、やはり“本当の悪”を意
識していたということに他ならない」

あるいは、その通りかも知れないと思った。

兄の目指した“誰かのために”精一杯戦える執務官を心掛けてい

る以上、アルシオーネの言うような“誰のためでもない”悪なんて絶対に見過ごせない。

私は、彼の言う通り、本当の悪を理解してしまったのかも。しかし。

「それでも、私のやることには変わりはありませんから」

アルシオーネが少しずつ後退し始めた。

「そうだな、ランスター執務官」

アルシオーネは、おとなしく投降するつもりなんて無いようだ。

私が階段に近づき、一段目に足を掛けるのと同じ、彼は素早く走り出した。

「待ちなさい！」

逃がさない。ここで取り逃がすわけにはいかない。今ここでアルシオーネを逃がせば、被害はまだまだ増え続ける。

何が本当の悪だ。何が誰のためでもない悪だ。

世界は、管理局は、いや、私はそんなものを思い知る必要なんてない。

本当の悪や、真の正義なんて知る必要も無い。私は、手の届く全ての人達を助けようと、精一杯走るだけなんだ。

もし、その道が間違っていたのなら、止めてくれる人はいる。

私は、もう惑わされない。

私は、もう迷ったりしない。

私は、執務官なんだから。

階段を駆け上がり、足がもつれそうになるくらい柔らかかな絨毯の上を蹴る。私はアルシオーネが姿を消していった廊下を走った。

廊下にはいくつもの部屋が並んでいて、そのどれもが扉をしっかりと閉ざしていた。

この中のどれかに逃げ込んだのかしら？

そう思った瞬間、突然左側の一番近い扉が開き、中からアルシオーネが飛び出してきた。

そして一瞬だけ視界に映った、アルシオーネの左手に握られたナ

イフ。何処からとも無くやって来る感覚が、身の危険を知らせた。頭を素早く振ると、私のこめかみがあった場所に一筋の軌跡が走る。

「よく避けたね」

すかさずクロスミラージユを構えてトリガーを引いたけれど、銃口から放たれた魔法弾の先には、既に誰もいなかった。

じっとしてはいけない。奴は次の行動を開始しているはず。

私の直感が言う通り、魔法弾を避けたアルシオーネが、間髪入れずに襲い掛かってきた。

左手に握られた冷たい刃は空を裂き、時折照明を反射させてその身を光らせる。

「この……!!」

再びクロスミラージユを構えようとすると、私の動きを読んでいるかのようにナイフが振り回された。拳銃である小型デバイスはそれほど大きな間合いを必要としないはず。それなのに、構えることさえままならない。

相手は普通の人間。魔導師でもない。スタンレベル軽度麻痺効果の魔法弾一発

で鎮圧は可能なはず。

一発だけ。たった一発だけでもいいのに。それだけ当てることが出来れば私の勝ち。

それなのに。

徐々に後退しながらナイフを避け続けていると、ふと、背後に壁が迫っていることに気付いた。

そして片足の踵が、遂に壁を蹴る。

「しまった!!」

私の声と同時に、アルシオーネが一際力んだように鼻息を荒げ、ナイフを振り下ろしてきた。

身を屈める私。そして、クロスミラージユの音声と共に私の頭上には橙色の魔法陣が展開された。デバイスによる自動防御が発動したようだ。

私みたいな射撃タイプの魔導師は、いざ自分が撃とうとする時にシールドが勝手に開いて妨げにならないよう、シールド自動展開の優先レベルを低く設定しているもの。私だってもちろんそうしている。

それなのにシールドが展開したということは、つまりそれだけ私の命が危険に晒されていたということ。防御動作が最優先されるまでに、私は追い詰められていたことの証。

シールドによって弾かれたアルシオーネのナイフは、しかし、すぐにまた振り下ろされた。

今度は私が自分の身を転がし、その場を回避した。ナイフの刃が壁を引き裂く音が聞こえる。

姿勢を起こしてクロスミラージユを構えてみると、またもや私の視界にはアルシオーネが映っていなかった。

一体何処に？

「クロスミラージユ、右手側を短剣状態タガーマードに切り替えて。それと周辺の生体反応を確認」

訪れる静寂の中、私は相棒の応答を聞きながら思考した。

身を隠せる場所と言えば、廊下の左右にある複数の部屋のどれかさつきまでの自分の無様さを思い出しながら、私は形態変換を終えた右手のクロスミラージユを握り締めた。

まさかこれほどまで手こずる相手だとは思わなかった。自分には魔法があるからと言って、慢心してはきつとやられる。

その時。クロスミラージユが反応を示した。

「そこ!？」

すぐ左隣にある部屋の扉を蹴破り、私は暗い室内に銃口を向けた。分厚い暗幕で窓からの陽光が完全に遮られていた。まだ陽は落ちていないはずなのに、部屋は星すら見えない夜のよう。

まだ部屋に踏み込まないでいると、突然、中からアルシオーネの声が聞こえてきた。

「君を切り刻まなくてはいけないことが悲しいよ、ランスター執務

官

「……………別に切り刻まなくたって、銃を向けても構わないのよ？
返り討ちにしてやるけどね」

そう言うと、彼は笑い声を交えながら言った。

「私のような単なる人間が魔導師相手に拳銃？　あまり賢いとは言えないね……………だろう？　ランスター執務官」

思わず苦笑した。

確かにその通りだと思う。実弾仕様の拳銃で魔導師の身に纏うバリアジャケットを貫こうというのは、少々無理がある発想だろう。衝撃緩和の最適効果範囲を外すという点では、人力による攻撃の方が適しているのだから。

「知っているのだよ、魔力攻撃以外の衝撃による、バリアジャケットの衝撃緩和最適範囲くらい。極端に大きな衝撃や、逆に人の手による小さな衝撃では、バリアジャケットの防御力は最大限発揮されないからね」

その通り。だからアルシオーネがナイフを武器としているのは、理に適っている。

「博識ですこと」

本当に、つくづく手強い相手だ。

いつ物陰から飛び出してくるかも分からない相手に備えながら、私はゆっくりと室内に踏み入ってみた。

一步。二歩。三歩。足音を立てないように気を配りながら歩を進めていくと、私の鼻に何やら鉄臭さが纏わりついてきた。

この臭い。幾つもの現場で嗅いだものと同じだ。
血。

ふと、足が何かを蹴飛ばした。その瞬間の感覚から、私は足元に転がるものが何であるかを感じ取り、思わず顔を顰めた。

「あなた……………まさか四人とも」

「五人だよ。残念だが召使いともお別れしてしまった」

突然、暗がりの中から恐ろしいほどの殺気を感じ取って、私は狙

いを定めることもしないまま前方に魔法弾を放った。

一瞬だけ瞬いた魔力光が、跳び掛かってくるアルシオーネの姿を映し出した。

すぐに避けようと身を翻したけれど、背後から伸びてきた一本の腕が首に巻きつき、それと同時に顔のすぐ隣には冷たいナイフの気配が感じられた。

動脈に狙いをつけたナイフ。アルシオーネの牙は、私の命をいつでも奪える位置にあった。

それがすぐに襲い掛かってこない理由は、私のクロスミラージューもまた、彼の顔に突きつけられているからだ。

お互いの動きが止まり、決して譲れない均衡状態が続く。

高鳴る鼓動を感じ取りながらも姿勢を維持していると、背後から私を捕らえるアルシオーネの声が、すぐ耳元で聞こえてきた。

「本当に残念だ。君を殺さなくてはいけないなんて」

「……………何故あなたは、こんなことを？」

「以前に話したことを覚えているかい？ 私は慈善活動が続けていくうち、こんな世界にうんざりしてしまったのだよ。救われるべき者が救われなかったり、正しき人間が虐げられたり。しかしその背景には、実は人々の思いやりが込められているものだ。悪意の裏には、その人達にしか分からない正義がある」

「何を言っているの？」

「君のお兄さんを厳しく咎めた男だつてそうだ。人々のために戦って命を落としたお兄さんは、役立たずと罵られた。しかし、役割を果たせなかったことは事実だし、犯人を逃がしてしまうことにより不安安全に晒される人々がいたこともまた事実。同情によって一人の死を嘆くのも正しい姿である一方で、お兄さんのミスの重大さを忘れてはいけないのもまた正しい在り方である。世界はそうやって、いくつもの正義が複雑に絡み合っつて構築されているんだ」

室内には、アルシオーネの声以外聞こえなくなっていた。

彼の声はやけに響く。

確かに、執務官となった今の私だったらもう少し違った見方も出来る。

誰かが兄を責めなければいけなかった。「失敗でした、ごめんなさい」では済まされることがあるのも、また現実なのだから。

「だけど、彼の言う理屈は。」

「そんな正義に満ち溢れているくせに、世界には救われない者がまだ多い。そこで思いついたんだ………世界には共通の敵が必要となる。世界中の誰もがたった一つの悪を共通の敵として認識すれば、人々は手を取りあい、助け合い、今以上に多くの人が一つの正義で繋がるだろう。誰もが一つの正義で繋がれば、手を差し伸べられない者などいない。誰かが必ず助けしてくれるし、誰かを必ず助ける世の中となる。だから」

「それは本当に正しいの？」

「それが世界の在り方なの？」

「そんな考えがまかり通るの？」

「私は選んだんだ。世界のどんな正義にも属さない、世界の誰とも繋がらない、唯一無二の、本当の悪になることを。思いやりのない、純真無垢の悪になることを。今でこそこの次元世界の一角に留まっている私だが、すぐにでも卒を飛び越えてみせるよ」

「……………そんなの、おかしい」

「アルシオーネは微笑んだ。」

「君なら分かってくれると思うんだ」

「分からないわ」

「いいや、分かる。だからこそ、私は君に惹かれてしまった。愛しいと思うくらいに惹かれてしまったんだ……………嗚呼、しかしそれではいけない。本当の悪は、誰にも属してはいけない。君にだって属してはいけない。故に今の私は、本当の悪を全う出来ない。それは駄目だ、それでは駄目なんだ。だから、君を殺さなくてはいけない」

「そんなの、絶対に許されない！」

「愛しいんだ、分かってくれるかい？ ランスター執務官。これほどまでに他人を愛したのは初めてだ。理性が利かなくなりそうだ。こんなにも誰かに依存してしまうのは初めてだ。きつと君にそれだけ惹かれている。だから、君がいては、私は悪になりきれない。誰かに思いを馳せてしまつては駄目なんだ」

首に巻きつく腕が急に締めまり、私とアルシオーネの体が更に密着していった。

ふと、腰部の辺りに押し付けられている、妙な感触に気が付いた。アルシオーネの一部、それが次第に膨れ上がっていくのが分かり、思わず鳥肌が立つ。

自分勝手な理屈。そんなもので世界を救おうとでも言つつもり？
「やっぱり、おかしいわ」

そうだ、おかしい。
人という生き物は、すぐに完璧を求める必要なんて無いのだから。
「もつと違う方法で世界を変えようとすれば良かったのに……………
あなたは」

本当の悪なんて知らなくてもいい。幾つもの正義がぶつかり合つてもいい。

間違つていてもいい。

目標に向かつて一生懸命に、大切なもののために一途に、ただひたすらに、がむしゃらに頑張れるのならば、きつと導きは訪れる。

そう、アルシオーネが間違っているならば、それでも彼なりに一生懸命ならば。

私が彼を導いてみせる。

アルシオーネの顔に向けていたクロスミラージユの柄で、ナイフの刃を素早く叩いた。

それに反応したアルシオーネの手が動き、首下に突きつけられていたナイフが走る。

頬を何かが掠めたような感触。その直後、微熱を帯びて紅い筋が私の顔に浮かび上がる。

それを気にすることも無く、私は足元に魔法陣を展開しながら銃口をアルシオーネに向けた。

アルシオーネも危険を感じたのか、素早い動作で身を翻したが、突然急に動きを止めてしまった。

その理由は。

「なっ………！」

彼が振り向いた先に、“もう一人の私”がいたから。しかもアルシオーネの首に抱きつくようにして、恍惚とした表情でその唇を彼に近づけて。

その隙を突いて、私はクロスミラーージュのトリガーを引き絞った。放たれた魔法弾は短い尾を引きながら、アルシオーネの体へ一直線に突っ込んでいき、そして着弾。

呻き声を残して意識を飛ばすアルシオーネは、動かぬその身をもう一人の私の足元に倒した。

「幻術魔法よ。良い夢見なさい」

アルシオーネの屋敷から、次々と遺体が運び出されていく。被せられたシートが一番大きく膨れているのは、おそらく主任捜査官の遺体だろう。一ヶ月前に暴言を吐き捨ててしまったことが謝れなくて、悔やまれる。

管理局員とたくさんの車でごった返すアルシオーネ邸を、私は近くの木陰からじっと見つめていた。

すると、五つの遺体に続いて屋敷から出てきたのは、トラヴィック・アルシオーネだった。

体躯の大きな管理局員四人に囲まれて、真っ直ぐと前を見据えたアルシオーネ。その顔には、後悔や絶望感などは全く浮かんでいないように思えた。

しかし、その思いはすぐに確信に変わった。

「やあ、ランスター執務官」

彼が私の方に気付き、にんまりと齒を見せて笑ったからだ。

「私の気持ちは変わらない」

「最低ね」

「また会おう」

「会えないわよ」

「いや、約束するよ。私はきっと君に再会する」

私は鋭い目で彼を睨みつけたまま、口を開かなかつた。

アルシオーネは、犯した罪を悔いるのだろうか。極刑は免れないであろう男に、私は心の中で問いかけた。

「幻だとしても、君からの口づけは嬉しかったよ」

いつか必ず、兄が目指したような姿に。

「だから、愛しい君へ敬意を表して、こう呼ばせてくれ

」

いつか必ず、私が志す姿に。

いつか必ず、強くて立派に。

そう、いつか必ず、こう呼ばれるのに相応しい姿に。

「ティアナ……………くっくくく」

“ランスター執務官”、と。

眉間の皺を深くしながら、私は固く誓った。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5279x/>

LANSTER ~ 執務官の憂鬱 ~

2011年10月31日23時34分発行